

令和元年6月12日現在

機関番号：33921

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04273

研究課題名(和文) 対人コミュニケーションに関する知識量テストの開発

研究課題名(英文) Development of a test of knowledge related to interpersonal communication

研究代表者

小川 一美 (OGAWA, KAZUMI)

愛知淑徳大学・心理学部・教授

研究者番号：70345875

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：対人コミュニケーションの中でも、非言語的コミュニケーションの影響力は大きいことが指摘されていることから、本研究では、非言語的コミュニケーションに関する知識量を測定できる信頼性と妥当性を備えたテストを開発した。非言語的コミュニケーションに関する知識量を測定するテストとして、Rosip and Hall (2004) による Test of Nonverbal Cue Knowledge (TONCK) があるが、項目数の多さなどの問題点があったため、これらを改善した TONCK-II を作成した。さらに、幅広い年代の日本人データに基づき、日本人用 TONCK-II も作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究より、非言語的コミュニケーションに関する知識を捉える欧米人用のテストと、日本人用のテストを作成することができた。本テストは、日本人の対人コミュニケーションに関する知識構造を明らかにする手立ての一つとなりうるであろう。

また、テストを作成する際には、客観的な根拠に基づく実証研究によるエビデンスを重視したことから、本テストを構成する項目を学ぶことによって、非言語的コミュニケーションの正しい知識を得ることができるようにもなり、トレーニングへの活用も可能であろう。さらには、日本人のみならず外国人日本語学習者の教材としての利用なども考えられる。

研究成果の概要(英文)：Nonverbal communication is known to have a major influence on interpersonal communication. Therefore, this study developed a reliable and valid test to measure nonverbal communication knowledge. Although Rosip and Hall (2004) have already developed a test for this, called the "Test of Nonverbal Cue Knowledge" (TONCK), there are some problems with it, such as a large number of questions. Thus, this study revised the test and named it TONCK-II. A specialized TONCK-II for Japanese people was also developed based on the data collected from Japanese individuals of different age groups.

研究分野：対人コミュニケーションに関する社会心理学的研究

キーワード：対人コミュニケーション 非言語的コミュニケーション 知識 人口統計学的変数 解読 テスト作成
異文化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

相川 (2009) は、ソーシャルスキルの生起過程の中心に知識が体制化されたものである社会的スキーマがあるとし、その社会的スキーマが全てのソーシャルスキル過程と相互に影響を与え合うというモデルを提案した。つまり、対人関係に関して適切かつ豊富な知識を持ち合わせていることは、適切かつ効果的な対人行動につながるということである。また、Morreale, Spitzberg, & Barge (2007) は、知識は全てのコミュニケーションの基盤であるとして知識を獲得することの重要性を主張している。しかし、こうした対人関係や対人コミュニケーションに関する知識に着目した実証的な研究や、知識の測定を試みた研究などはほとんど行われていない。そこで本研究は、蓄積された実証研究のエビデンスに基づき対人コミュニケーションに関する知識テストを開発することを目指した。

2. 研究の目的

(1) 研究 1: 非言語的コミュニケーションに関する知識テストの作成

対人コミュニケーションに関する知識は、解読などの認知過程を含めたコミュニケーション行動に影響を及ぼす重要なものであるとされている (相川, 2009; Hall, Blanch, Horgan, Murphy, Rosip, & Schmid, 2009)。つまり、対人関係に関して適切かつ豊富な知識を持ち合わせていることは、適切かつ効果的な対人行動につながるということである。しかし、対人関係や対人コミュニケーションに関する知識に着目した実証的な研究や、知識の測定を試みた研究は稀少であり、ある感情を感じた際の人の特徴に関する知識量を測定するテストとして GEMOK-Features を開発した Schlegel & Scherer (2018) や、非言語的の手がかりについての知識の量が対人コミュニケーションにおける解読スキルの個人差に影響を与えると考え、非言語的の手がかりについての知識量を測定する Test of Nonverbal Cue Knowledge (TONCK) を開発した Rosip & Hall (2004) が挙げられるくらいである。

対人コミュニケーションの中でも、非言語的コミュニケーションが持つ影響力の大きさはよく知られていることである (Birdwhistell, 1955; Mehrabian & Wiener, 1967)。そこで、本研究では、対人コミュニケーションに関する知識のなかでも、非言語的コミュニケーションに関する知識に焦点を当てて、測定尺度の作成を試みる。Rosip & Hall (2004) が非言語的の手がかりについての知識量を測定するために開発した TONCK は、主観に依らず、実証データに基づき緻密な手順で項目の選定を行った。また、信頼性の分析や I-T 分析、妥当性の検証なども行われている。しかし、TONCK は項目数が 81 項目と多く、利便性が高いとはいえない。また、質問文の解釈によって正答が複数考えられる項目も一部含まれていた。そこで、研究 1 ではこうした課題を改善し、新たなテストである TONCK-II を作成することとした。

さらに本研究では、非言語的コミュニケーションに関する知識の特徴を記述するため、性別、年齢、社会経済的地位などの人口統計学的変数との関連も検討する。

(2) 研究 2: 非言語的コミュニケーションに関する知識と動機が解読の正確さに与える影響

研究 2 の目的は、非言語的コミュニケーションに関する知識とより正確に解読をしたいという動機が、対人場面における解読の正確さに及ぼす影響を検討することである。対人コミュニケーションに関する知識は、対人行動や対人的な認知過程に影響を及ぼすと考えられている (相川, 2009; Hall et al., 2009; Morreale et al., 2007)。一方、より正確に解読をしようという動機と、対人的な正確さの関係は、少なくとも非言語的な手がかりに関する解読においては一貫した結果が得られていないと言われている (Hall, 2011)。これまでの研究で着目してきた動機は、報酬などの一時的な外発的動機づけによるものや、操作的に活性化されたジェンダーステレオタイプの動機などであった。そこで、本研究では、自身の解読力を向上させたいと思っているという個人差としての動機に焦点を当てる。Hall (2014) は、これまでの研究で動機が対人的な正確性を高めなかった理由の 1 つとして、知識が制限要因として働いたからではないかと指摘している。この指摘からも、対人的な正確性に対する知識と動機の影響をそれぞれ検討しているのでは不十分であり、2 つの要因の交互作用的な効果を検証する必要があるといえる。Forrest, Feldman, & Tyler (2004) の知見などに基づき、研究 2 の仮説を次のように設定した。知識量が多い人の場合、向上動機が高い人の方が低い人よりも、他者の感情や状況などをより正確に解読することができる。一方、知識量が少ない人では、向上動機の高さによる他者の感情や状況の解読の正確さに違いは見られない。なお、知識量が多い人の方が少ない人よりも他者の感情や状況の解読が正確であるという主効果も予測される。

(3) 研究 3: 日本人用非言語的コミュニケーションに関する知識テストの作成

研究 1 で作成した TONCK-II は、欧米人用に英語で作成されたテストであり、また非言語的コミュニケーションには文化差があることなどから、項目内容によっては正誤が文化によって異なる可能性もある。そこで、本研究では項目内容の適否の検討も含めて、日本人の非言語的コミュニケーションに関する知識を測定しうるテストの作成を試みる。

3. 研究の方法

(1) 研究 1: 非言語的コミュニケーションに関する知識テストの作成

参加者 Amazon Mechanical Turk (MTurk) の 300 人 (男性 155 名, 女性 142 名, 不明 3 名)

の worker であった。用意した質問について回答した参加者には\$0.60 が支払われた。ただし、回答時間や回答内容について疑義が抱かれた 70 名および欠損値のある者を除外し、224 名を分析対象とした (男性 109 名, 女性 115 名; $M_{age} = 38.50$; age range = 19-69)。

調査項目

a) The test of Nonverbal Cue Knowledge-II (TONCK-II) : TONCK (Rosip & Hall, 2004) は、もともと true か false で回答させる 128 項目からスタートしているが、それらの項目は、非言語的コミュニケーションに関する複数のハンドブックに示された実証的研究に基づく知見から作成されていた。そして、信頼性の分析や I-T 分析に基づき、81 項目に絞られたという経緯があり、妥当性の検証なども行われていることから、可能な限り TONCK の項目を採用することが望ましいと考えた。そこで、項目内容に含まれる手がかりの部位 (声, 顔, 姿勢や動き) と項目内容の領域 (感情, 情動的な状況, 欺瞞, その他の文脈) のバランスを考慮し、TONCK の項目がそのまま採用できるものは採用し (14 項目), 表現を修正して使用可能なものは修正し (4 項目), 手がかりの部位や領域に対して項目が不足している部分は新たに項目を考案し (9 項目), 合計 27 項目のテストを作成した。新たに作成した項目については、先行研究でデータによる実証が行われていることを基準とし文章化した。

b) 解読力向上動機尺度: 非言語的コミュニケーションに基づく解読力を高めたいと思うかという動機を測定するため、16 項目について 9 段階で回答を求めた。

c) 解読力に関する自己評価尺度: 自身の解読力がどれくらいであるかを測定するため、解読力向上動機尺度と同様の 16 項目について、どれくらい正しく判断できるかを 9 段階で評価させた。

d) 人口統計学的変数: 性別, 年齢, 人種, 英語の堪能さ, 客観的な社会経済的地位 (教育程度, 収入), 主観的な社会経済的地位 (MacArthur Scale of Subjective Social Status; Adler, Epel, Castellazzo, & Ickovics, 2000) について回答を求めた。

手続き 参加者は、最初に Informed consent に関する説明を読み、同意した場合に質問項目への回答に進んだ。最後に、デブリーフィングと、報酬を得るためのコードが示された。

(2) 研究 2: 非言語的コミュニケーションに関する知識と動機が解読の正確さに与える影響

参加者 参加者は英語を母語とする者が英語のスキルが優れている 18 歳以上の 200 人 (男性 89 名, 女性 111 名) であった。測定には約 1 時間かかり、参加者には \$15 が支払われた。

測定項目

a) The Test of Nonverbal Cue Knowledge-II (TONCK-II) : 研究 1 で作成したテストを使用した。

b) Geneva EMOTion Knowledge test - Features (GEMOK-Features) : Schlegel & Scherer (2018) によって作成された感情語の意味や利用に関する知識を測定するテストであった。

c) 解読力向上動機尺度, d) 解読力に関する自己評価尺度: 研究 1 と同様であった。

e) 人口統計学的変数: 性別, 年齢, 人種, 英語の堪能さについて回答を求めた。

解読力のパフォーマンステスト

a) MiniPONS : 表出される非言語的な手がかりからその状況や場面を解読する能力を測定するものであり, Rosenthal, Hall, DiMatteo, Rogers, & Archer (1979) が作成した Profile of Nonverbal Sensitivity (PONS) の短縮版として Banziger, Scherer, Hall & Rosenthal (2011) が作成したテストであった。

b) Geneva Emotion Recognition Test (GERT-S) : 顔や声や体の動きから他者の感情を読みとる能力の個人差を測定するために, Schlegel & Scherer (2016) が作成したテストであった。

c) DANVA2-Facial Expression (Nowicki & Carton, 1993) d) DANVA2-Posture (Pitterman & Nowicki, 2004) e) DAVA2-Paralanguage (Baum & Nowicki, 1998) : 成人の顔, 姿勢, パラ言語からその人物の感情を読みとる能力を測定するものであった。

手続き 参加者は、Northeastern University にある実験室にやってきて、最初に Informed consent に関する説明を実験者からされ、同意書を読み署名した場合に測定に進んだ。最後に、デブリーフィングと、謝礼が渡され、測定は終了した。

(3) 研究 3: 日本人用非言語的コミュニケーションに関する知識テストの作成

調査対象者 20 代から 60 代の男女が各 50 名以上となるよう株式会社インテージにオンライン調査を依頼し 522 名から回答を得た。ただし、回答時間が非常に短かった者や、全項目に一貫して正もしくは誤と回答していた 33 名を除外し、男性 233 名、女性 256 名を分析対象とした。

調査項目

a) 日本人用非言語的コミュニケーションに関する知識 (日本人用 TONCK-II) : 研究 1 で作成したテストについて邦訳を行い、さらにバックトランスレーションしたものを TONCK および TONCK-II の作成者であるアメリカ人研究者が確認を行い、議論を重ねて最終的な邦訳を完成させた。各項目に対して、正しいと思うか間違っていると思うかの二択で回答させた。

b) 日本人用 TONCK-II についての確信度: a) の各項目について、どれだけ自信を持って回答したかを 5 段階で評価させた。

c) 人口統計学的変数: 性別, 年齢, 客観的な社会経済的地位 (教育程度, 年収), 主観的な社会経済的地位 (MacArthur Scale of Subjective Social Status; Adler et al., 2000) を測定した。

4. 研究成果

(1) 研究1: 非言語的コミュニケーションに関する知識テストの作成

The test of Nonverbal Cue Knowledge-II (TONCK-II)の作成

IRT (Item Response theory) モデルを適用する前提である、尺度の1次元性の検討を行った。TONCK-II の27項目について1因子を仮定してカテゴリカル因子分析を行ったところ、適合度が低かった (RMSEA=0.036, CFI=0.652, TLI=0.623)。27項目の内容には欺瞞に関するものが含まれていたが、Buller & Burgoon (1994), Miller & Stiff (1993), Vrij (2008) の知見から、欺瞞は対人コミュニケーションの一つの状況ではあるが、特異な場面であるとも言える。そこで、欺瞞に関する6項目を削除し残りの21項目について1因子性を仮定したカテゴリカル因子分析を行ったところ、各適合度指標は、RMSEAが0.021, CFIが0.916, TLIが0.906となり、モデルの当てはまりは問題ないと判断された。そこで、IRTを適用した分析を行い、項目パラメタの推定を行った。項目特性関数のモデルには、2パラメタ・ロジスティック・モデルを採用した。21項目の識別力パラメタおよび困難度パラメタと正答率をTable 1に示した。項目の選定にあたっては、識別力パラメタが高い、すなわち識別力が高いと思われる項目を採用する必要があるが、項目10の識別力が0.149と特に低かったためこの項目は削除することとした。以上の手続きの結果、TONCK-IIの項目として選択された20項目について信頼性指標として係数を算出したところ.728となり、20項目によって非言語的コミュニケーションに関する知識を測定することが可能と判断した。

Table 1 TONCK-II の項目パラメタ推定値

item	slope	location	正答率
1 Anger in the voice is revealed by a decrease in speech rate.	0.331	-1.147	.591
2 Smiles can signal attentiveness and involvement.	1.568	-2.339	.939
3 When people are disgusted with someone, they tend to pull the person's arm rather than pushing it.	0.452	-3.136	.796
5 Someone who blinks a lot may be anxious.	1.293	-2.194	.904
6 People gaze less when they like or love their partner.	0.464	-3.574	.830
7 Sadness is not easily identified from a person's voice.	0.504	-1.909	.713
8 People are likely to engage in self-touching when thinking (processing information).	1.120	-1.707	.826
10 Anger is conveyed by a forward head tilt, forward chest bend, and arms at the sides.	0.149	1.269	.452
11 Letting someone touch us on the head shows a trusting, or intimate, relationship.	0.918	-3.048	.922
12 To tell if someone is truly feeling amusement or enjoyment, we need to look at his or her eyes.	0.346	-2.334	.687
14 Amusement is not easily identified from a person's voice.	0.525	-2.848	.804
15 In a conversation speakers glance at their conversation partner at the end of a thought unit or idea.	0.920	-1.821	.809
16 When people sympathize with someone, they tend to stroke and pat the person's arm.	1.357	-1.569	.835
18 Lowered brows are not a common sign of an angry feeling.	0.986	-1.182	.726
19 Rapid head nods are a signal to the speaker to finish quickly.	0.682	-2.495	.826
20 Joy is conveyed by less intensity and slower speech.	1.256	-1.910	.870
22 An expanded posture with head tilted back and arms akimbo (arms on hip) means a pride expression.	0.942	-1.332	.743
23 Under stress, the pitch of the human voice gets lower.	0.621	-1.778	.735
24 When judging emotions from facial expressions, observers often confuse surprise and fear.	0.660	-2.075	.778
25 We raise or drop pitch of the voice at the end of a comment to signal the end of a speaking turn.	1.503	-1.302	.804
26 How long people wait before speaking when it is their turn doesn't seem to distinguish people who are high and low in social anxiety.	0.434	-1.604	.661
削除された欺瞞に関する項目			
4 Liars have more dilated pupils than truth tellers.			.583
9 Observers can tell pretty well whether someone's facial expression reflects real or feigned (faked) enjoyment.			.730
13 Liars display more of the gestures used to illustrate speech than truth tellers.			.422
17 People are more likely to touch themselves while telling the truth than when lying.			.765
21 Liars speak in a higher pitch of the voice than truth tellers.			.591
27 Liars hesitate less during their speech than people who are telling the truth do.			.543

弁別的妥当性と収束的妥当性の検証

TONCK-II の弁別的妥当性を検証するため、解読力向上動機尺度および解読力に関する自己評定尺度との関係性を分析した。結果、TONCK-II と解読力向上動機尺度の相関係数は $r=.033$ (ns)、TONCK-II と解読力に関する自己評定尺度の相関係数は $r=.123$ ($p=.066$) であり、動機とは無関係、自己評定ともほとんど相関は示されなかった。次に、TONCK-II の収束的妥当性を検証するため、感情に関する知識を測定する GEMOK-Features (Schlegel & Scherer, 2018) との関係性を分析した。GEMOK-Features は、基本的感情を中心とした 10 個の感情について人がそれらを経験するときどのような特徴を示すかを問うものであり、非言語的コミュニケーションも感情も対人的コミュニケーションと深く関わる側面であるため、それらの知識の保有状況は正の相関関係を示すと考えられる。研究 1 では GEMOK-Features を測定していなかったため、研究 2 のデータを用いて、TONCK-II と GEMOK-Features の相関係数を算出したところ、有意な正の相関関係が示された ($r=.417$, $p<.001$)。

IRT を適用した分析から、最終的に 20 項目がテスト項目として採用され、係数も許容範囲内であったことから、Rosip & Hall (2004) による TONCK のように項目数は多くないものの、十分、非言語的コミュニケーションに関する知識を測定するテストとして利用可能であることが示された。また、TONCK-II の弁別的妥当性と収束的妥当性の一部が証明されたと言える。

TONCK-II と人口統計学的変数の関連

非言語的コミュニケーションに関する知識の特徴を記述するため、TONCK-II と性別、年齢、教育程度、収入、主観的社会経済的地位といった人口統計学的変数の関連を検討した。まず、性別によって TONCK-II の得点に違いが見られるかを確認するため t 検定を行ったところ、性別による小さな効果は見られたものの、有意差は示されなかった ($t(222) = -1.570$, ns , $d=.21$; 男性 $M=0.774$, $SD=0.149$, 女性 $M=0.803$, $SD=0.129$)。次に、人口統計学的変数を説明変数、TONCK-II を目的変数とした重回帰分析を行った。決定係数の値は大きいとは言えないが、モデルは有意となり、性別から TONCK-II に対する標準偏回帰係数は有意傾向であり ($\beta=.125$, $p=.061$)、教育程度から TONCK-II に対する標準偏回帰係数は有意となった ($\beta=.159$, $p=.023$)。性別は男性を 0、女性を 1 としたダミー変数であったため、女性の方が男性よりも知識量が多い傾向にあるという結果であった。また、教育程度に関しても正の標準偏回帰係数であったため、教育程度が高いほど知識量が多いという結果であった。

まず、性別との関連であるが、Rosip & Hall (2004) でも女性の方が男性よりも非言語的手がかりに関する知識の量が多いという結果であったことから、この結果は安定した傾向と言えるかもしれない。また、教育程度が高いほど知識量が多いという結果であった。Rosip & Hall (2004) によると、TONCK と知能には強い関連が見られなかったことから、非言語的コミュニケーションに関する知識はいわゆる一般的な知能とは異なる概念であると言える。学歴が高い者は、ネットワークの総数が多く、友人数も多いことが明らかにされている (Fischer, 1982; 原田, 2012; 林, 2000; 松本, 2005; Moore, 1990; White & Guest, 2003)。ネットワーク総数が多く、友人数も多いということは、相互作用を行う相手の数が多く、多様なコミュニケーションに接することになる。したがって、学歴が高い者は多様なコミュニケーションへの接触の過程で、コミュニケーション行動の法則性や一般性を学習し、そのことを知識として蓄積している可能性が考えられる。

(2) 研究 2: 非言語的コミュニケーションに関する知識と動機が解読の正確さに与える影響 知識量、動機、自己評価が解読力の正確さに与える影響

非言語的コミュニケーションに関する知識量、解読力向上動機、解読力に関する自己評価、解読力のパフォーマンステストの各得点に男女差が見られるかを分析した。各得点を従属変数、性別を独立変数とした差の検定をおこなったところ、解読力に関する自己評価得点以外はすべて有意差が示され、いずれも女性の方が男性よりも得点が高かった。したがって、これ以降は、男女を区別して分析を行うこととする。

非言語的コミュニケーションに関する知識、感情語の意味や利用に関する知識、解読力向上動機、解読力に関する自己評価のいずれが解読力の正確さに影響を強く及ぼすのか、またそれらの交互作用的な効果は存在するのかが検討するため、各解読力のパフォーマンステストごとに階層的重回帰分析を行った。各テスト得点を基準変数、ステップ 1 では TONCK-II、GEMOK-Features、解読力向上動機、解読力に関する自己評価を説明変数とし、ステップ 2 では知識 (TONCK-II、GEMOK-Features) と解読力向上動機、知識 (TONCK-II、GEMOK-Features) と解読力に関する自己評価、解読力向上動機と解読力に関する自己評価の組み合わせによる交互作用項を説明変数とした。なお、各変数には男女差が確認されたため、男女別に分析を行った。

分析の結果を概観すると、知識量が多い人の方が少ない人よりも他者の感情や状況の解読が正確であり、女性に関しては、向上動機が高くても知識が伴っていなければ他者の感情解読のパフォーマンスは低くなるということが示された。

(3) 研究 3: 日本人用非言語的コミュニケーションに関する知識テストの作成

日本人用 TONCK-II の作成

27 項目の内、日本人データによる実証研究がなされており、結果が欧米人の結果と一致している 19 項目を分析対象項目とし、正答を 1 点、誤答を 0 点とした。その際、正答であっても確

信度で「全く自信がない」と答えた項目については、誤答とみなした。研究1同様、欺瞞に関する4項目を削除してカテゴリカル因子分析を行ったところ、固有値の減衰状況や因子負荷量などから1次元性が認められた。次に、項目反応理論を適用した分析を行い、項目パラメタの推定を行った。その結果、項目10と項目18の識別力が0.064および-0.009と低かったためこの2項目は削除した。以上の手続きの結果採択された13項目について、信頼性指標として係数を算出したところ.757であったため、この13項目で日本人の非言語的コミュニケーションに関する知識を測定することが可能であると判断し、正答率を算出し、知識量を示す指標とした。

性別、年齢、社会経済的地位(SES)との関連

日本人の非言語的コミュニケーションに関する知識量の特徴を明らかにするため、性別、年齢、客観的および主観的SESを説明変数、日本人用TONCK-IIを目的変数とした重回帰分析を行った。決定係数の値は大きいとは言えないが($R_{adj}^2=.043$)、モデルは1%水準で有意となり、年齢からの標準偏回帰係数は有意な負の値を示し($\beta=-.147, p=.008$)、主観的SESは有意な正の値を示した($\beta=.187, p=.002$)。つまり、日本人の場合は年齢が若いほど、そして主観的SESが高いほど、非言語的コミュニケーションに関する知識が多いことが明らかとなった。一方、英語を母語とする者を対象にした研究1では、女性の方が男性よりも知識量が多く、教育程度が高いほど知識量が多いことが示されたが、年齢や主観的SESとの関連は見られなかった。

本研究より、非言語的コミュニケーションに関する知識を捉える欧米人用のテストと、日本人用のテストを作成することができた。本テストは、日本人の対人コミュニケーションに関する知識構造を明らかにする手立ての一つとなりうるであろう。また、テストを作成する際には、客観的な根拠に基づく実証研究によるエビデンスを重視したことから、本テストを構成する項目を学ぶことによって、非言語的コミュニケーションの正しい知識を得ることができるようになり、トレーニングへの活用も可能であろう。さらには、日本人のみならず外国人日本語学習者の教材としての利用なども考えられる。

<主要引用文献>

- Rosip, J. C. & Hall, J. A. (2004). Knowledge of nonverbal cues, gender, and nonverbal decoding accuracy. *Journal of Nonverbal Behavior*, 28, 267-386.
- Schlegel, K., & Scherer, K. R. (2018). The nomological network of emotional knowledge and understanding in adults: Evidence from two new performance-based tests. *Cognition and Emotion*, 32, 1514-1530.

5. 主な発表論文等

[学会発表](計3件)

小川一美・木村昌紀・藤原健 日本人用非言語的コミュニケーションに関する知識テストの作成 日本心理学会第83回大会, 2019年

Ogawa, K. & Hall, J. A. Influence of knowledge and motivation on interpersonal accuracy. 2018 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention. 2018年

小川一美・Hall, J. A. 非言語的コミュニケーションに関する知識と人口統計学的変数の関連 日本心理学会第82回大会, 2018年

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 木村 昌紀

ローマ字氏名: (KIMURA, Masanori)

所属研究機関名: 神戸女学院大学

部局名: 人間科学部

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 30467500

研究分担者氏名: 藤原 健

ローマ字氏名: (FUJIWARA, Ken)

所属研究機関名: 大阪経済大学

部局名: 人間科学部

職名: 講師

研究者番号(8桁): 00707010

(2)研究協力者

ローマ字氏名: Judith, A. Hall

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。